

元気あおもり応援隊会議（首都圏）

「元気あおもり応援隊会議（首都圏）」を令和4年5月16日（月）午後5時45分からホテルメトロポリタンエドモント（東京都千代田区）で開催しました。

当日は、20名の応援隊の方々が参加し、会議では「令和4年度『選ばれる青森』への挑戦～コロナを乗り越え、世界の宝 縄文と共に未来へ～」をテーマに意見交換を行いました。

その概要は次のとおりです。

（青森県知事 三村知事(以下知事)）

本日は大変お忙しい中、「元気あおもり応援隊会議」に御出席を賜り、誠にありがとうございます。

この2年間、新型コロナウイルス感染症の影響により、開催中止を余儀なくされておりましたが、本日、直接お会いして、自由闊達な意見交換ができますことを嬉しく思います。

また、皆様方には、それぞれのお立場から「あおもりの元気づくり」に御支援をいただいています。厚く御礼申し上げます。

青森県では、これまで「生活創造社会」実現に向けて、「世界へ打って出る」視点も取り入れながら、「攻めの農林水産業」を展開いたしますとともに、観光分野をはじめ、地域において「経済を回す」取組を重点的に進めてきました。

その結果、農業産出額や農林水産品の輸出額は堅調に推移してきたほか、外国人延べ宿泊者数や創業・起業件数も増加するなど、様々な分野において、取組の成果が着実に現れてきたところですが、一方で、長期化する新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、本県においても依然として幅広い分野に大きな影響を及ぼしています。

このため、県では、感染拡大防止や保健・医療提供体制の整備に、引き続きしっかりと取り組みますとともに、社会経済回復の変化にも的確に対応しながら、地域経済の早期回復とコロナの先を見据えた事業展開の推進を図るため、県産品消費拡大や販売促進、観光需要の喚起など、経済を回す取組の再起動や各産業分野におけますICT化の促進など、デジタル化の推進にも積極的に取り組んでいるところです。

さらに、こうした中、昨年7月には、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産登録が実現いたしました。平成17年に登録を目指すことを表明して以来、長い道のりとなりましたが、三内丸山遺跡をはじめとする縄文遺跡群の価値が世界から認められたことは、大変誇らしく、喜びに堪えません。これまで応援していただいた皆様に心から感謝申し上げます。

今後、関係自治体と連携しながら、このかけがえのない遺産をしっかりと守り、次の世代に引き継いでいきますとともに、その価値や魅力を国内外に積極的に発信しながら、青森県を訪れてくださる方々に一層の感動を感じていただくことができるよう、活力と魅力あふれる地域づくりに向けて取り組んでいきたいと思っております。今後とも御支援・御協力を賜りますようお願いいたします。

本日は、この「世界の宝」、縄文遺跡群を活用した取組をはじめといたしまして、国内外から「選ばれる青森」を目指す本県の様々な取組につきまして御説明させていただきますので、何卒忌憚のない御意見・御提案を賜りますよう、お願いを申し上げますとともに、青森県のイメージアップや情報発信などへの一層のお力添えを重ねてお願い申し上げます。



【令和4年度「選ばれる青森」への挑戦～コロナを乗り越え 世界の宝 縄文とともに未来へ～】
企画政策部長が資料に基づき県の取組を説明。

(薄井充裕氏)



デジタル田園都市国家構想と青森県との関係についてお伺いいたします。

現在、デジタル田園都市国家構想が地方創生の観点から議論されています。

コロナという大きな出来事を契機に、今、様々な問題が日本全体に降りかかっていると思います。例えば、ここ東京、大都市においては、過密のリスクです。

それから、電車やバスで通勤する移動リスクについて、非常に強く意識されています。

そこから、むしろ自然に恵まれ、職住一体、あるいは近接化されているというところの価値が再度クローズアップされ、地方居住の良さというものが見直されているのではないかと考えます。

また、それが可能となる要因としては、デジタル化の進展によって、例えば、リモートワークやワーケーションが普及するとともに、地方では5Gといった、いわゆる基盤整備も進んでいるということも新しい事象だと思います。

更に地方の本質的な良さ、ここに人々の関心が大きく寄せられていると思います。歴史的文化遗产や、例えば祭りに表象されている伝統、あるいは文化、それが脈々と継承されていることへの畏敬といいますか憧れ、それから地方の方が、むしろ教育環境が優れているということも相まって、定住、あるいは移住への強力なモチベーションとなり得ると考えます。

さて、先ほども「『選ばれる青森』への挑戦」を拝見していましたが、青森県は、私が皆様に申し上げるまでもなく、すべての要素を併せ持っている、かつ優位性があると考えます。豊かな自然、素晴らしい食文化、その中には、今日の資料にございます、ジュノハート、これも素晴らしいものです。

それから、東北で最大級のデータセンターが、いち早く立地が進んでおります。これも、実は大変なアドバンテージだろうと思います。

更には世界遺産、しかも2つの世界遺産が、まさに全国のトップブランドとして存在していることは、訴求性が高いものだと思います。

こういったことから、国で検討されているデジタル田園都市国家構想にあるように、デジタル・田園都市・国家構想の3つのキーワードが青森県において非常に有力なある種のサジェスチョンを与えているのではないかと考える次第です。

そういった観点から、県の大きな取組の方法といったものを教えていただければ大変ありがたいと思います。

(知事)

ありがとうございます。

デジタル田園都市国家構想に関しまして、青森県は、いろいろな意味において、今後、優位性があるのではないかとのお話をいただきました。過密のリスク、移動のリスクなどがないのではないかとありますが、デジタルに係る技術革新、例えば光ファイバー等により、通信のスピードや回線が物凄く速くなっています。スマートフォンの登場でも驚きを感じましたが、意思伝達、情報伝達ということが素晴らしく速くなっています。それによる弊害も考えられますが、このような技術革新をどれだけ良い方向に活用していくかということを考えていく必要があると思っています。

デジタル化により、青森県だけではなく、人類にとって様々な可能性が出てきましたが、それによってどういうことができるか、技術だけではなく、いろいろなことに繋がっていくことに改めて衝撃を受けました。

青森県として、DX時代に移住・定住方面をどのように進めていくかということと人材育成等について、説明させていただきます。

(企画政策部長)

移住・定住に向けた取組について、説明させていただきます。

ご助言にありましておき、コロナ禍により世の中が大きく変わりました。具体的には、これまで県内から首都圏に進学とか就職で出る高校生や大学生が1千人以上、少なくなってきております。

これを好機と捉えて、県内の高校生または大学生に青森県で住む魅力、もしくは青森県で就職する、こういった良さやメリットを強く訴えかけているところです。

また、首都圏のように、大都市圏に出た人の中で、できれば故郷に戻りたいという方々も沢山いらっしゃると思いますので、そういった方々にも、例えば、ウェブを使った情報発信を強化して、移住やU I Jに強く取り組んでいくこととしております。

引き続き、市町村、県、力を合わせていろいろな情報を発信していきたいと考えております。

(知事)

「今こそあおもりで暮らそう推進事業」にも取り組んでいます。

(商工労働部新産業創造課長)

デジタル人材不足につきましては、当分野の第一人者である坂村先生によるセミナーを実施するなど人材育成に取り組んでいます。他にも、県外IT人材と県内のIT企業の交流会等に取り組んでいます。

また、リモートワークにつきましても、県内でテレワークを体験する「お試しテレワーク」「お試しリモートワーク」の機会を提供して、本社で従事しながら青森で生活するモデルの創出に取り組んでいます。

(知事)

通信コストや交通コストが安くなったという利点も生かし、これまで青森は遠いから辛い、やっぱり近場でというところから、もう一歩進めて、行くなら青森と思っただけのような方向も少しずつ見えてきました。

デジタル人材についても、いろいろと募集したところ、青森出身の首都圏等で活躍している方々が、この機会に、このような時代になったからこそ、青森に戻っていろいろなことができるのであればと仰っただけようになってきました。

「デジタル田園都市国家構想」の理念も踏まえ、今後どのような方向に変わっていくかを考える必要があると思います。今のあり様を大事にしながらも、例えば、奥入瀬溪流を朝散歩し、十和田湖のほとりで仕事をしながら、子育てしてみたいといった、多様な生き方ができるような国になったら、本当にいいなと思っています。

そのために、最大限努力していきますので、皆様にも益々応援していただければと思います。

(大西達也氏)

久しぶりに皆さんにお会いできて本当に嬉しいです。

私は、世界遺産登録されました縄文遺跡群について、北海道新幹線開業を契機にPRしてきた津軽海峡交流圏(ラムダ)とオーバーラップさせた誘客集客が効果的だと考えています。

具体的には縄文遺跡群の中の青森県内+道南(函館市)をコアエリアに設定した周遊コースをリアル&バーチャルで創設し、2015年3月から活動しているラムダ作戦会議のメンバーも活用してはいかがでしょうか。

コロナ禍で観光に向けた取組も大変だったのではないかと感じておりますが、ラムダ作戦会議のメンバーは、非常に活動的な方々が多く、縄文遺跡群を活用した誘客にも、民間の生きの良



い方々を活用してはどうか提案いたします。

このラムダ作戦会議で扱いました青森県と道南という地域は、縄文遺跡群とエリアも被っておりますし、実際にそこで活動されている方々の出身地（所在地）も重なっています。ラムダから縄文へのような、人の移行（活用）を進めていただけると、結果もついてくるのではないかなと思っております。

私自身は、どういう形になろうとも、お呼びがかかればいつでも参上するつもりでおりますので、今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

（知事）

ありがとうございます。

昨年、三内丸山遺跡をはじめとする縄文遺跡群の価値が世界に認められたことは、大変誇らしく、嬉しく感じておりますが、一方で、長期化する新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、幅広い分野に大きな影響を及ぼしています。

引き続き、感染拡大防止や保健・医療提供体制の整備に、しっかりと取り組みながら、「世界の宝」の価値や魅力を積極的に発信していきたいと考えております。

北海道道南と青森は縄文時代から行き来があり、その頃からの想いというのがあり、とても大事な関係だと感じています。

ご提案いただいたラムダ作戦会議等含め、道南との連携を深め、民間の元気で新しい考えを持った方々の力を活用していくことが非常に大事だと思っております。

（企画政策部長）

ラムダプロジェクトについてお話をさせていただきます。

この3年間、ラムダ作戦会議の方で、リアルで津軽海峡圏ウェルネス博を開催していただきました。

また、リアルでできなかった時期には、オンラインで、例えば、「おうちであおもり冬景色」とか、「#オンライン青森冬景色」こういったものを取り組んでいただきました。本当にありがとうございました。

本日はラムダ作戦会議の主要メンバー3名にも出席いただいておりますが、コロナ禍でも工夫していろいろな事業を続けていくということが大事だということがよく分かりました。

先ほど、大西さんから御助言がありましたとおり、現在のラムダ作戦会議のメンバーには、函館で縄文遺跡群に係る取組を一生懸命やっているNPOの代表の方も入っております。6月1日には青森で、今年度第1回目のリアルでの会議を開催する予定ですので、その時には本当にいろいろな方面から、更にアドバイスをいただければと思います。

私共も、皆様方と一緒に汗をかいて、北海道新幹線、またゼロからのスタートになると思いますが、もう一度再起動していきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

御助言、ありがとうございました。

（観光国際戦略局長）

観光に関しては、この2年間、本当に厳しい状況が続きましたが、漸くこの春は、弘前の桜祭りをはじめ、沢山のお客様が青森に来ていただきました。

この夏に向けては、いよいよ3年ぶりにねぶた祭りも本格的に実施できそうです。青森の観光事業者さんは、非常に張り切っております。こうした中で、この7月は世界遺産登録1周年になりますが、これは、青森だけではなく、北海道・北東北の各社、今、一番期待しているところです。

この中で、縄文遺跡群は広範にわたっておりますので、どうやって回していくかというのが1つの課題でございます。

昨年度は、人流が抑制されている中で、我々、トライアルとして実行したのが、オンラインのリモート観光でございまして、1万年の歴史を120分で巡るリモート旅には、全国から非常に沢山の参加者が来ていただきました。

こういった面、あるいは、やはりリアルで見ていただくことも重要です。

こうした中でラムダ会議のラムダ委員のお一人でございます、「また旅くらぶ」の高木まゆみ

さんが考案したのが、なかなか公共交通機関で巡るのが難しいという課題をクリアするために貸切タクシーを利用した、ガイド付きの少人数ツアーです。これを今、通年販売に向けて準備しているところでございます。

また、北海道・北東北、全部の遺跡を長い時間をかけ、遺跡だけではなく、食や祭りなども組み合わせたツアーとして、団体のバスツアーというような形で造成を検討しているところで、我々観光局も、こうした取組をバックアップしながら、是非、この夏こそ沢山のお客様に青森、北東北・北海道に来ていただくような取組を、また委員の皆様とも一緒に取り組んで参りますので、どうぞよろしく願いいたします。

(知事)

局では青森の縄文遺跡群に係る取組に5,322万6千円も計上しています。やる気満々です。

(兼平慎氏)



縄文遺跡群の世界遺産登録、おめでとうございます。縄文時代というのは、栗を栽培していましたが、私は、そういったことが、まだまだ知られていないのではないかと思います。

私が育った弘前には、小栗山という山がありましたが、そこに小さい頃はよく毬栗が落ちていました。

栗はお好きな方が多いと思いますが、縄文と栗との関係をもっともっと大切にして欲しいと思っています。

栗の収穫量について調べてみますと、残念ながら青森の収穫量は全国で35位です。1位が茨城県で2位が熊本、3位が愛媛となっています。

何故、青森県は縄文の三内丸山があるのに栗の栽培にもっと力を入れないのかなと、それが前々からずっと心に残っています。私は非常にりんごも好きですが、栗も大好きです。

皆さんもご承知のとおり、いろいろと栗を使った美味しいものがあるわけですので、この栗を題材にして、りんごとは、またもう一つ別に北東北、それから北海道に共通の何か栗の文化をテーマにしたお土産だとか、あの太い木を使って何かを作る等、名産を是非作っていただきたいと思っています。

弘前の小栗山では、今、頑張っ栗の生産をやっている方が何人かいらっしゃるようですので、県として応援できることをやって、栗の文化を広めていただくと、更に盛り上がるのではないかと思います。

(知事)

ありがとうございます。

縄文時代に、栗はまさに管理、栽培、要するに植えて作っていたということで、それが和栗に繋がっているかと思います。

和栗の分野では、実は、私共にも生産力に非常に有数なものがあります。この和栗を使って、バームクーヘンを作った会社がありまして、全国のイオンさんとかヨーカ堂さんの青森フェアで和栗の生産、縄文の和栗の宣伝もしています。

他に、本日お土産に使わせていただきました、和栗の焼モンブランですが、本当に美味しいものができていると思いますし、他にも生かしていける道を探っているところでです。

例えば、鯨ヶ沢の深谷で深谷の栗を40%使った、栗焼酎も復活しましたが、この縄文遺跡群の世界遺産登録をチャンスにしようと、頑張っています。

今日のお土産の和栗の焼モンブランは本当に自信あります。

(総合販売戦略課)

当課では、県産品の販売・PR等をしております。

お土産品として、焼きモンブラン等を作っております、県内の主要な観光施設、三内丸山遺跡の売店にも置いてありますし、新青森駅とか空港にもございますので、皆様、今日召し上がっ

て美味しいと思っていただけましたら、青森にいらっしゃった際には、是非お土産としてお買い求めいただいてPRしていただく等、いろいろな場面で皆様の御協力をお願いしたいと思います。

また、深谷の栗を使った焼酎については、鱒ヶ沢町限定で扱っています。5月1日から発売で、2,700本作りましたが、まだ残っているということでございますので、鱒ヶ沢町にいらっしゃった際には是非、御協力をお願いしたいと思います。

青森県では、御存知のように栗の生産量は少ないですが、作っている方々は、精鋭部隊といってよく、非常にやる気を持っていらっしゃいます。県としては、そういった方々を応援しながら、こういった新しい商品づくりも支援していきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いたします。

(知事)

縄文以来の栗の文化は存在していますが、イメージとして持ってもらうまでには、アピールが足りないのかなということを感じています。

りんごについて言えば、やっぱりりんごは凄いいというイメージがあるようで、私共と神戸で取り引きしているワールド・ワンさんという居酒屋のグループの例を出しますと、そこでは、りんごのスイーツも一杯置いています。神戸の三宮には「あら、りんご。」という、りんごのスイーツやりんごジュースなどの店を出しています。コロナ禍でも非常に流行りまして、大阪のルクアと、それから天王寺の「アベノハルカス」にも、向こうから頼まれて出しています。そのぐらい、イメージというものの力が凄いいと感じています。青森のりんごを使ったということで、一定の値段をいただいておりますが、最高のものをきちんと作ること、「A! Premium」システムで、朝作ったものが次の日の午前中にもう並ぶようにするという取組もやっています。

縄文文化をもっともっと理解してもらえるようになりますと、和栗のイメージも持っていただくことができるのではないかと思いますので、頑張ります。

また、是非、焼きモンブランを食べていただいて、高い評価をいただければありがたいと思っております。

セールスも必死にやっています。

(権柄典氏)



私は、韓国の観光振興PRや日韓の観光交流等の仕事に30年間携わってきました。青森との縁も20年ぐらいになります。

昨年7月、縄文遺跡群が世界文化遺産に登録されましたこと、本当におめでとうございます。

本日は、ディスティネーションとして選ばれる青森について、お話をしたいと思います。

私も東北勤務時代から、青森には何度も訪れて美味しいものを食べたりと、青森の魅力について、十分とは言えないまでも、ある程度分かっているつもりです。青森は食、大自然、文化といろいろな面が揃っていて、非常に魅力的なところだと思っております。

また、目に見える部分だけでなく、青森県の方々の情の温かさや、ねぶた祭りに代表されるような、エネルギー的な部分、そして、オープンマインドな部分など、そういった人の魅力が何よりも一番だと、個人的に思っております。

観光面におきましても、りんごをはじめ、食の魅力も盛り沢山で、八甲田山から見下ろす風景も非常に心に残っております。

今回、世界遺産登録されたことにより、まさに自然と文化の魅力が加わり、これからもっと青森の人气が高まるんじゃないかと思っています。

このため、青森が旅行先として選ばれるためにいろいろと考えてみましたが、私は、人々が旅行をする目的は、何かを得るためなのではないかと考えております。

物だけではなく、目に見えない何かしらの満足を感じたい、そして、日常から離れて癒されたという部分もあるのではないのでしょうか。最近では、コロナの影響もあって、自然を好む傾向も

ありますし、何か感動を得る、人からもらう元気といったことも大事だと思います。

また、その土地に住んでいる住民の方々が、自分の地域に誇りを持って一生懸命生きていく姿、そういう部分にも感動する要素があると思います。

その観点から、一つ目として誇れる縄文遺跡を目指すということを考えました。

先ほど申し上げたように、青森は雄大な自然や人情、情熱に溢れていますが、今回、縄文遺跡群が新たに世界文化遺産に登録されたことを契機に、もっと青森の県民の方々が誇りをもって、自分たち自身でいろいろな場面でアピールしていくと、日本の方々も含め、世界から来る方々に、もっと感動を与えられるのではないかと感じています。

旅行をする人々は、マイナス面より、肯定的な明るい面を求めているのではないのでしょうか。

青森県の方々が自身の文化に自信を持って、元気に暮らす、そういうところをみていただくだけでも、何かを感じていただくことになり、それが感動につながっていくと思います。

県としては、住民が観光に興味を持って直接参加する形、いわゆる住民参加型のイベントなり、住民が自ら縄文遺跡群をPRするなど、そういったことを発信していく方向へ働きかけていくのも良いのではないかと思います。

また、最近は、SNS時代ですので、住民が遺跡について自ら発信する、特に、若い人たちはSNSなどが得意なので、若い人たちを活用して情報発信していければいいと思います。

2つ目としては、縄文文化を楽しみ、親しみ、楽しむ。こういう観点からのアプローチが必要ではないかと考えます。

旅行というものは、勉強よりは楽しいこと、面白いことを求めるものです。ネットで調べて見たところ、記念グッズやお菓子等が沢山開発され、好評を得ているように思われます。

これからも、こういう部分を含めて開発していく必要があると思いますし、縄文文化に関する服飾などをレンタルしてくれるところがあると、もっと楽しめるんじゃないかと思います。

(知事)

権さん、ありがとうございます。

権さんは、私たちと韓国を繋いでくれて、一緒に仕事もしてきました。本当にありがたいなと思っています。

それでは、三内丸山遺跡センターから、縄文の持っている価値や良いところについて、これからのように縄文遺跡群やその楽しみ方を発信するかについては、観光国際戦略局から説明します。

(三内丸山遺跡センター副所長)

世界遺産に登録されたことは、県民にとって誇りと自信をもたらしてくれましたが、この世界の宝である遺跡群を次世代へしっかり引き継いでいくということが大事だと思っています。

三内丸山遺跡は、日本最大級の集落ということで、取材が毎週のように来ていて、皆さん、遺跡の規模感に非常にびっくりされ、この5,900年前という古い時代のものがきちんと保存されているということに感動され、取材をしてお帰りになっています。

私共は、これから適切な保存と活用に取り組んでいくことになっております。地域住民の方々とは、ボランティアガイドで沢山の方に、協力していただいておりますが、更に人材育成として、ボランティアガイドの養成講座等を行って、地域と一体となって、保存と活用を行っていきたいと思っておりますので、今後とも、よろしくお願いいたします。

(観光国際戦略局長)

縄文の魅力や価値の発信についてご説明いたします。

御覧になった方はお感じかもしれません。

縄文遺跡は、一見しただけでは、その魅力がなかなか伝わり難い面もございます。縄文の現地の遺跡ガイドの方々は、縄文は地下に真実、地上にロマンという言葉の口にしてあります。縄文が持つ、このロマンや価値をいかに分かりやすく伝えることが大事かと考えております。

そうした中で、我々の、1つの事例を御紹介いたします。

こちらの新聞広告でございますが、これは一昨年、コロナ禍が日本中を覆っていた重苦しい雰囲気に対する本県観光のメッセージといたしまして、「大きく息を吸おう 縄文の呼吸」という

コンセプトで、全国紙で2ページにわたって全面掲載した広告でございます。

今でも息苦しいマスク生活が続いているわけですが、青森県には、もう1つの世界遺産「白神山地」あるいは「奥入瀬溪流」のような、縄文時代から続く空気の美味しい場所が沢山ありますよ、ということをおアピールしたものでございます。

今、世界中で「都市から地方へ 密からまばらへ」と関心が高まっている中で、今後も1万年前から癒しの故郷であった縄文と本県の価値や魅力を新しい切り口も交えて発信して参ります。

また、こうしたメディアだけじゃなくて、先ほど御指摘があったようなSNSなども通じて、若い人に向けた分かりやすい発信も続けてございますので、こうした中で、皆さんの御支援、引き続き賜りますことをお願いいたします。

(知事)

こういったお互い納得感のある活用といいますか、「いいよね」というのを基本として、どんどん伝えていくことを、戦略的にやっていきたいと思っています。

また、早く大韓航空の直行便を復活させて、韓国の済州との交流、自然遺産交流、文化遺産交流も一緒に連携してやっていきたいと思っていました。

様々な場面で、また、アドバイス等、応援いただければと思います。

本当によろしく申し上げます。

(山内史子氏)

御無沙汰しております。

昨年度は、縄文遺跡群の世界遺産登録ということで、こちらにいらっしゃる木谷敏雄さんと東奥日報さんの場を借りて、縄文はウェルネスだという、連載をさせていただきました。

また、総合販売戦略課に、酒と食のペアリング事業というのがありましたが、青森の日本酒、シードル、焼酎など、100種類以上とつまみ300種類以上を連日、真剣に合わせて、最高のペアリングを見つけ出すという事業で、例えば、にしんの切り込みとシードル。あるいは、田酒とくじら餅という意外な組み合わせを発見しまして、ウェブサイトでお紹介していますので、是非覗いてみてください。

今回は、最初の御案内にクルーズ船の寄港拡大という御案内がありましたので、それについて、経験を語らせていただければと思います。

以前、青森にも寄港したことがあるシルバー・ミュージズのアラスカクルーズに乗船したことがあります。その時にびっくりしたのが、寄港地にヘリコプターがずらっと並んでいました。船を降りたお客様がワンデートリップでヘリコプターを利用してあちこちに行く。あるいは、水上飛行機を使って、野生の熊を見に行ったりという、ある種、お金の使い方が違う方たちがラグジュアリークルーズにはいらっしゃいました。

それを見た時に、青森は広い、宝物が一杯ある。ただ、車で回るには、ワンデートリップはできない。縄文遺跡に行って帰って来るぐらいです。

もしヘリコプターがあれば、下北半島にも行ける、津軽半島も行ける、桜祭りを見て十和田湖も行けるかもしれない。縄文遺跡、あるいは白神という、世界遺産ダブルコースも可能かもしれないということを感じました。今後、まだ先のことだと思いますが、クルーズ、もしくはインバウンドの動きが活発になってきた時に、青森だったら、そういった価値を訴えられるのではないかなと思います。

おそらく他県では、そういった動きは、まだ見られていないので、そこを先に進められると面白いと思います。お天気次第ですけども、冬に寄港したら、八甲田にスキーに行って帰って来るということも、実際、ヘリコプターで行くスキー場はありますので、そういうことができれば、青森県をもっともっとアピールできるかなと思った次第でございます。是非、何か先々含めて御検討いただけると、特に青森は湖が点在していますので、水上飛行機というのも夢ではない話ではないかなと思います。



(知事)

ありがとうございます。

今まで団体バスをどうするかとか、いろいろな取組を進めてきましたが、これからはそういった方向についても考えていく必要があるということですね。クルーズ船が登場してから、外国船を利用するお金持ちの方々は、お金の使い方も違いますし、いろいろな良いもので、本物でないと買っていないといったことを感じていたところですので、ご提案、嬉しく思っています。

クルーズ船については、国内はもう飛鳥のクルーズが始まってきましたが、以前の水準に戻すためには3年ぐらいかかると思っています。新型コロナウイルスの感染状況の落ち着きだけではなく、営業して、段取りしてから決まるのに2年ぐらいかかると思われますし、実際に来るとなるとその次の年ということになりますので、もう1回、1からやり直し、段取りしていきたいと思います。

その中で、こういった考え方も取り入れていきたいと思えます。

今、神戸と青森はフジドリームエアラインで繋がっていますが、神戸はクルーズ船の大メッカでもあるので、エア&クルーズとか、青森を拠点にして北海道をぐるっと回るとか、半分回って、また帰るといった、いろいろな選択に対応できるように、我々も積極的に組み合わせを上手く考えながら、クルーズ船を戻して、ラグジュアリー船のオーナーや運営会社とも連携を進めながら、今言われた提案について検討していきたいと思えます。

(港湾空港課)

山内さん、どうもありがとうございます。

県のクルーズの寄港拡大に向けた取組としましては、大型船の誘致にこれまでも力を入れてきましたが、最近では、山内さんがおっしゃるとおり、ラグジュアリー船の誘致というところにも非常に力を入れてきておまして、そういうラグジュアリー船に分類される船社のキーパーソンやそのラグジュアリー船の商品を作っているランドオペレーターの方々を青森県に招請をして、富裕層をターゲットにした、上質な寄港地観光プログラムというものの造成を目指して、今、取り組んでいるところです。

1つ、具体的なターゲットとして狙っている例を申し上げますと、オーストラリアのクルーズ船なんですが、シーニッククルーズという、大体220人ぐらい乗るラグジュアリー船なんですが、この船には、ヘリコプターとか潜水艇というものを搭載しているクルーズ船というのも、実は世界各国を見るとそういうのもありまして、まさにこういうところの誘致が実現しますと、山内さんがおっしゃっているような青森県をヘリコプターで周遊するような、あるいは、可能かどうか分かりませんが潜水艇で海中遊覧できるようなダイナミックなプログラムというのも実現できるのではないかと考えて、その誘致の実現に向けて引き続き取り組んで参りたいと考えております。

(知事)

気合が入っています。

(観光国際戦略局長)

今、ラグジュアリーな旅というような御提言がございました。

このコロナ禍の中で、特に付加価値の高いコンテンツ開発でありますとか、予算をかけた長期旅行、あるいは地球環境や地域社会に配慮したSDGsな旅。こういったもの、特に欧米からの旅行者の間でブームとなっているわけでございます。

こうした旅においては、例えば、旅先でお金を払ってごみ拾いをするのが魅力的なコンテンツになるわけで、縄文につきましても、旅行者が遺跡を守る役割を担うプランでありますとか、あるいは、世界自然遺産 白神山地の清掃活動を伴うプランなど、こういった新しい旅についても、観光局の方では検討しているところでございます。

(三村知事)

じわじわと戦略的に動いています。3年後、4年後を目指して頑張っています。

(司会)

折角の機会ですので、感想等でもお聞かせいただければと思います。

(安井勝一氏)



私は今年の3月までとなりますが、JALの青森支店に5年半おりました。

これまで、三村知事と一緒に青森県を盛り上げて、多くのお客様に青森に来ていただく取組をしてきましたが、現在は国内販売部というところで、国内線の販売をしており、今度はしっかりと多くのお客様をお送りしたいと思っております。

知事がいつも仰っている立体観光に関して、今までも陸、海、空と連携し、東北、北東北並びに

北海道含めて展開すべく取り組んで参りましたが、話題となっている縄文をキーに、また併せて自然遺産である白神山地が30周年を迎えるということもありますので、全国の中でも僅かと思われる自然遺産と文化遺産が両方あるという強みを各関係先と一緒にしっかりと発信していきたいと思っております。

先ほど、山内さんからヘリコプターを使った観光というお話がありましたが、私共も、航空だけではなく、いろいろな取組をしております、空飛ぶ車というものを、開発中でございます。

現在は、2025年の大阪万博の時に向けて、実証実験できるように、開発を進めているところです。

このような取組が進み、簡単にまさにエアタクシーのようなものができれば、この広い青森の中を簡単に行き来できるようになるのではないかと思いますし、これから時代もそういう方向に進んでいくと思っておりますので、より簡単に県外とも行き来できるような仕組みを開発し、しっかりと皆さんと一緒に盛り上げていきたいと思っております。

ありがとうございました。

(知事)

御提案、ありがとうございました。

ドローンが出来てから、空飛ぶ車、本当になってきたということに、我々も驚いています。

(熊谷喜八氏)

料理人の熊谷喜八でございます。

先ほどから皆さんのお話を、楽しく聞かせていただいております。

私は料理人ですから、食についてお話いたします。

私共のグループで「AKOMEYA」という、お米を中心に関連した食べ物を売るという事業がございます。

グループの総合力がありますので、巷では、結構有名になってきておまして、現在、12~13店舗に青天の霹靂も置かせていただいております。

お店の商品を構成する時には、私が全て審査しています。先ほどからモンブランの話などいろいろとありましたが、物が売れるということには、いろいろなコツが必要になってきます。

そういったことについて、聞いてみたいといった際には、お呼びいただければ、いつでも飛んで参ります。

また、観光地については、そこに相応しい飲食だとか、お土産屋さんだとか、そこに合っているかどうかといったことも、はじめに考えなければいけないと考えております。

以前、青森県の本を作る時に、県内を3千キロぐらい回らして、青森のことをいろいろと知ることができました。ただ、あまり環境に似合わない飲食といったものを見かけることもありま



すので、そんな時も呼んでいただければ、いろいろとアドバイスができると思います。

私が持っている知識等は全部次の世代にお渡ししていきたいと思っていますので、青森のために力を使わせてください。

本当に今日はありがとうございます。

(知事)

人と人が会えるということは贅沢なんだなと実感しています。これまで行き来ができない中で、我々も忸怩たる日々を送っていましたが、今回は、久しぶりに直接皆様方から御意見・御提案を伺うことができました。

応援隊の皆様方には、これからも様々な場面において、いろいろな形で青森のことを共によくしていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

ありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。

応援隊の皆様、今日は、本当にありがとうございました。

これをもちまして、首都圏での「元気あおもり応援隊会議」を終了とさせていただきます。